



経験を地域の中で

厚谷 司

後藤健二夕張市長（当時）が二〇〇六年六月「法の下での財政再建」を決定してから五年を迎えた。私が夕張市職労委員長の任に就いたのが二〇〇五年一〇月であったことから、私の委員長として、退職するまでの五年六カ月には財政再建問題と向き合う取り組みが中心であった。

二〇〇七年三月末、職員の約半数にも及ぶ一五二名の職員が退職した。二〇〇六年十一月に財政再建計画の基本的枠組みが公表され、その徹底した歳出削減策は市民を震撼させるものであり、またその公共サービスの担い手である私たちの賃金や職員定数の削減策

を目の当たりにしたとき、直感的にこれでは行政組織が崩壊すると思ったことを、今でも鮮明に記憶している。当時は多くの職員が賃金等の待遇面以上に「職員として必要なし」との宣告とも受け止められるその内容に、職場を去る意思を固めた者も多かった。

巨額赤字の責任を問われる環境下において、当時の市職労としても行政機能麻痺の問題提起から見直しを再三求めるものの、受け入れられず「去るも、残るも個々の意思尊重」としか提起できない状況であった。多くの職員の無念を払拭する結論を導き出せなかったことは、今でも私の心に深い傷を残し

ている。

財政再建計画開始から五年目を迎える職場には若干の落ち着き、笑顔こそ戻ってはきたものの、二〇〇六年一月月に直感した不安は未だ解消されてはいない。すべての職員もそう感じながら日々業務に従事している。

その中、私が二〇一一年四月八日、二六年間勤務してきた市役所を退職し、第一七回統一自治体選挙の組織内市議候補となった。

職員数の不足している状況において、敢えて現職から組織内市議を擁立すべきなのかとの議論もあった。その中で市職労が決断したことは、現職市議は四期を務め次期は不出馬の意向であるが、来る新市長の誕生に向け新たな人材、将来を見据えた議会の体制づくりも併せて必要であるとの結論から、私の擁立に至ったものである。

教育委員会勤務であった私自身も、小学校の大規模統合直後ということもあり、実感する余地もないまま退職日を迎えた。退職日には職員各位から、思いもよらない様々な気持ちを伝えて



頂いた。その言葉から受け止めたことは、厳しい夕張の状況下、労組の機能もままならない状況の中ではあったが、組織の進んできた方向に誤りはなかったのだと、気づかされました。

昨年の晩夏から、夕張市長選挙をどう体制構築するかという議論が最重要課題となり、その結果こそが将来の夕張を大きく左右するのだと議論を重ねてきた。しかし今までの夕張には経験のない、新たな体制づくりには時間を要し、市議選対応については年明けに持ち越しとなった。

二〇一〇年一月その体制は不十分ながらも整い、元東京都職員の鈴木直道氏が出馬の意向を固めた。彼は表明当時まだ二九歳、財政再建計画スー

ト時に東京都からの派遣職員であった。そんな若い彼に對する大きな期待は、総務大臣まで繋げた市民アンケートに見られる行動力、破綻責任の当事者として、市民から厳しい目を向けられ、未曾有の人員削減の中で多忙を極める職員に代わり、敢えて市民の中に入ろうとし、それを実行してきたことである。しがらみの多い夕張市において、彼なら「オール夕張」を実現できる人材であるという判断に至ったのである。市職労は支持という形でこの選挙戦に臨んだ。

前衆議院議員を含む四氏が立候補する市長選挙では、「高齢化率の高い夕張は若者がしつかり支える街にする」と訴えた、鈴木直道氏が三五九票を獲得し当選、全国最年少市長が誕生した。私も一二八一票を頂き初当選を果たすことができた。

新市長や私にとってこの一期目の任期は夕張市の再生に向けた正念場を迎えるだろう。

人口の流出抑止、住宅再編、地域医療、福祉、地域振興と。今の夕張に必

要とする対策には当然財源が必要となる。自治権の回復という点での計画期間の短縮と併せて考えると、夕張は二兎を追い続ける状況が続いていく。

国の管理下にあっても、夕張を将来へしつかりと導いていくためには、全国最低のサービスという冠を外さなければならぬこともある。それを実現しなければならぬ。

現在私は市議としての活動を始めた。まずはあらためて現行の財政再生計画を広い視点で見直していきたい。併せて全国的に議会改革が叫ばれる中、夕張もその例外ではなく議会基本条例の制定を目標に取り組んでいきたい。

しかし何より念頭に置きたいことは、これまでの労組役員としての経験を地域の中でしつかりと活かすことであらう。議論・気づき、丁寧な説明である。議事機関の一員としての役割とともに、経験を地域の中で生かすことで新たな任務に取り組み、日々奮闘している仲間とともにこれからも歩みたい。

△あつや つかさ・夕張市議会議員▽